アレクサンドロス大王の空中飛行

髙木　麻紀子

2024年の晩夏、残暑厳しいミラノの空港に降り立った。北イタリア、ロンバルディア州の中心都市であるこの街は、近年も最先端のファッションやデザインの発信地として広く知られているように、長い西洋の歴史のなかで文化、芸術の都として重要な役割を演じてきた。筆者が研究対象としてきた国際ゴシックの時代にも、イタリア映画界の名匠ルキーノ・ヴィスコンティ監督の先祖にあたるヴィスコンティ家のパトロネージのもと、優美な宮廷美術がはぐくまれる要衝のひとつとなっていた。レース編みのような繊細な模様が施された尖塔を多数擁するミラノ大聖堂の壮大な姿が、当時の街の隆盛をいまに伝えてくれている。今回も、まずは大聖堂にごあいさつ、とホテルに荷物を預けるとすぐに地下鉄の駅に向かった。改札を出て薄暗い階段をのぼってゆくと、明るい夏の光のもとキラキラと輝く白大理石のファサードが目に飛び込んできて、思わず感嘆の声をあげていた。しかし、今回のミラノ滞在の真の目的は実はミラノではない。中央駅から電車で約2時間の港町ジェノヴァに、15世紀制作のタピスリーのなかでも破格の規模を誇る《アレクサンドロス大王の生涯》の調査に赴くことである。

キリスト教会が圧倒的な力を誇った西洋中世の世界において、もっとも人気を博した古代史上の人物のひとりがアレクサンドロス大王であった。前人未踏の大征服を成し遂げ、32年という短い生涯を彗星のごとく駆け抜けたこの王の存在が、人々の好奇心を掻き立てたであろうことは想像に難くない。すでに大王の生存中より語られ始められた伝説の数々は、その後、さらに枝葉を広げて巨大に育ち、3世紀に至ってエジプトのアレクサンドリアでまとまったかたちで編纂された。これが著名な『アレクサンドロス大王物語』である。興味深いのは、中世の時代、聖書の次に読まれたといわれるアレクサンドロス大王を取り上げた文学作品やそれに依拠した造形芸術が根拠としたのが、大王に纏わる歴史的な著作や史料ではなく、この大衆向けの奇想天外で空想に満ちた『アレクサンドロス大王物語』であったという事実である。物語のなかで大王は、鉄とガラスでできた即席の潜水艦で深海探検をしたり、言葉を話す木や鳥に出会ったり、無頭人や巨人の国を訪ねたりと、指輪物語やハリー・ポッターの元祖ともいうべきファンタジックな冒険を繰り広げる。そのなかでも中世美術史上、もっとも造形化されたといってもよく、また筆者もお気に入りのエピソードが、「アレクサンドロス大王の空中飛行」である。そのカタログ化を行った越宏一氏によると（越宏一「アレクサンドロス大王の空中飛行　その美術作品カタログ」『国立西洋美術館年報』No. 10、1976年、22-73頁）、西洋中世においてこの図像は、ある種の道徳的観念の担い手として表されており、特に「Superbia　傲慢、思い上がり」のシンボルとなる傾向を有していたという。しかし氏はまた、すべての作例がこうしたネガティブな象徴性を担っていたわけではないことを豊富な作例と共に紹介しており、その好例がジェノヴァのヴィラ・デル・プリンチペの「巨人の間」に展示されている連作タピスリー《アレクサンドロス大王の生涯》である。

今夏、念願かなって実見できた《アレクサンドロス大王の生涯》は、《アレクサンドロス大王の幼年期》と《アレクサンドロス大王の事績》の2帳からなるタピスリーであり、規模と質の両面で15世紀の世俗タピスリーを代表する傑作である。本来は全6帳で構成されていたと推察されるものの、今日確認できるのはこの2帳のみであり、1460年頃のトゥルネー作とされる。フランス人作家ジャン・ウォクランがブルゴーニュ公フィリップ善良公に捧げた『アレクサンドロス大王物語』を典拠とするというその図像で、大王は、中世の騎士道精神を継承した理想的君主の規範と見做されており、ゆえにタピスリーの所有者であったフィリップ善良公の顔貌を有しているのである。《アレクサンドロス大王の事績》の画面中央上部に、例によって空中飛行に挑むアレクサンドロス大王としてのフィリップ善良公の姿をみつけることができる。大王の乗った檻には4頭のグリフォンが鎖で繋がれている。はらぺこの怪獣たちは、鼻先に人参をぶらさげられた馬のごとく、大王がもつ槍の先端に刺さった馬の肝を追いかけて飛翔するのだ。織の質の高さによって、手で触ることができそうなくらいの写実的なディテール描写が達成されている一方で、グリフォンという現実世界には存在しない幻想獣が登場するという虚実入り混じるそのイメージは、この図像の最終形態とも思えるような異様な魅力を放っていた。事実、このあとの造形芸術の世界では、史実に基づく大王像が主流となり、中世美術で基調をなしていたファンタジックな大王像は徐々に姿を消してゆくことになる。

調査を終えると次なる目的地を目指し、ミラノから飛行機でアルプス越えをすることとなった。眼下に広がる白雪を戴く山並みを飽きることなく眺めながら、大王が空からみた「ちっぽけな、平土間」（『アレクサンドロス大王物語』伝カリステネス・橋本隆夫訳、ちくま学芸文庫、2020年）のようなこの世界のことを思っていた。